

蒼葉

裾野市立深良中学校だより

平成24年5月2日発行

第 5 号

発行人 校長 鈴木史良

グローバル・アイを育てる

— 社会、世界の出来事に目を向け、判断する力を養う —

毎朝授業前のひとときに新聞の切り抜きを読み、感想をもったり発表し合ったりする＜グローバル・アイ＞活動が始まって1か月たちました。昨今、ニートの若者の増加が社会問題になっていますが、日本の若者をたくましく育てていくためには、「何のために学ぶのか？」という目的意識を明確にもたせる必要があります。しかし、これだけでは進学のため、将来の自分のため等々、自己本位な目標になる傾向が散見します。この時にこそ、これからの子どもたちに必要な視点として、本校で力を入れているのが、「今、自分たちがどんな

社会を生活しているのか。」という持続可能な社会を実現するために必要な視点です。私たちの生活している社会をよく知り、理解することによって、世の中の仕組みやそこに生きる人々の心情など、これまで気づけなかったことを知ることができますし、直面する困難な問題も正対し、力を合わせて乗り越える能力を培うことができるものと期待を寄せています。今、日本の多くの学校は朝読書全盛の時代ですが、あえて自分の好きな本を読むだけの朝読書を問い直し、今年度から＜グローバル・アイ＞活動を導入いたしました。

確かな学力保障部では、この活動の初動期のアンケートをとりましたので、概要をお知らせいたします。

【アンケート項目とその結果】

肯定：4段階評価のうち「かなり当てはまる」「まあまあ当てはまる」の1～3年生合計の割合（％）を示したもの

- (1) 私は日頃、よく新聞を読んでいる。→ 肯定（16％）
- (2) 私はTV報道番組をよく見ている。→ 肯定（76％）
- (3) 私は世の中の出来事全般に興味がある。→ 肯定（37％）
- (4) 私は文章を読んだとき、どんな内容が書かれていたのか考える。→ 肯定（52％）
- (5) 私は文章を読むだけでなく、自分なりの意見や感想をもてる。→ 肯定（46％）
- (6) 私は自分の考えを自信をもって人前で発表することができる。→ 肯定（29％）

＜1年生の感想＞

- ・あまり新聞を読まないの漢字が読めない。
- ・文章が難しい。習ってない漢字が読めない。
- ・新聞なんて全然読まなかったから、自分のためになっていると思う。



1年生の＜グローバル・アイ＞

- ・中学生になって感想を書く力ができたと思う。これからも世の中の出来事について深く知りたい。

＜2年生の感想＞

- ・毎日いろいろなジャンルの記事があっておもしろいし、楽しみです。
- ・学年関係なく一斉に読むから、先輩や後輩とも話ができていいと思う。
- ・新聞を読むのは面倒だと思っていたけれど、読んでみると何となく知っていた出来事をより深く知ることができ、また知らなかった情報を得ることができていいと思った。

＜3年生の感想＞

- ・最初は読書で好きな本が読めなくなってしまうのであまり好きではなかったけれど、世の中のことを知ることができて好きになってきた。
- ・世の中の問題や今の日本を知ることができて受験にも役立つと思う。しかし自分で選んだ本も読みたいし、新しい新聞も読みたい。週に何回か分けた方がいいと思う。

これまで読んだテーマ例

- 「自転車は左」 3割知らず
- 中学武道必修化
- 燃料返送なら原発大半停止
- ダル米デビュー 猛攻に冷や汗
- 放鳥トキ ひな誕生
- 社会還元自らの意志で
- インドネシア沖M8.6
- 日中交流 静岡の学校で浙江日報記者

予想通り新聞をよく読んでいる子どもたちは、全体の16%という数字でした。新聞にじっくり目を通すことよりも、TVの報道番組を視聴することのほうが5倍近く多いという事実は、大人でも近似の傾向があると思います。しかし、文字情報を読み起こし、生きた情報として脳内に取り入れることは、TV報道番組を見流す、聞き流すよりもずっと脳によい影響を与えるのではないかと思います。1年生には難しい漢字や記事が出てくるかもしれませんが、少し背伸びをして新聞記事に挑戦していくうちに確かな読解力が身についてきます。

ある日の授業風景 1年生 数学「正の数・負の数」 授業者 山口裕加

サッ。一斉に手を挙げます。今、1年生の数学では「正の数・負の数」の加法、減法を学んでいます。中学校に入り、今まで勉強してきた足し算や引き算と異なり、最初はとまどうこともありましたが、今では自信をもって手を挙げ、発表しています。

「4です。どうですか？」

「ちょっと違います。」

「…あっ、+4です！」

「いいです。」

「よし、全問正解だ！」

「先生、僕、完璧でした。」

「あー、1問間違えちゃった！悔しい。」

正解した楽しさ、間違えた悔しさをこれから一緒に感じていきたいですね。

